
帰国渡日児童・生徒つながる会

～子どもたちのために何ができるか～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

- ・名称「帰国渡日児童生徒つながる会」
- ・目的

現在京都府内の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような子どもたちは、言葉や文化が違うということから、他の日本人の子どもたちとのコミュニケーションが上手くいかず、クラスで孤立してしまうことも多いようである。そのため、共に出会い、活動することを通して、同じようなことに悩んでいる人がいるのだと知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ることができること、また一人一人が持つ個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身がその国の言語や文化を大切にできるような場を提供することを目的として、2008年度より e-project を利用し活動を続けている。

・活動の概要

つながる会の活動は主に一年を通して春と夏と冬の3回、各数日間行い、それに向けて週一回程度ミーティングを行っている。つながる会の活動をより多くの外国につながる子どもたちに知ってもらうため、活動日の1、2カ月前にはチラシと申し込み用紙を作成し、京都府内の中学校に郵送し、また京都市立中学校には大学を通じてお知らせを送っている。

参加者は中国にルーツを持つ子どもとフィリピンをルーツを持つ子どもが大半であり、今年はパグアサと共同で行っている勉強会（たけのこ会）に小学生が参加するようになった。

また外国にルーツを持つ子どもたちのことをより多くの人に知ってもらおうと、6月には京都新聞で記事を書いたり、11月に京都ヒューマンフェスタ 2013 でブースを出したりなど外に向けた活動を行った。そして今年は台風 30 号でフィリピンが被害に遭い。支援をするために募金活動を行った。

2. 代表者および構成員

・代表者

嵯峨根早紀	教育学専攻	3 回生
-------	-------	------

・構成員

日下部真依	国語領域専攻	4 回生
口石 梨絵	国語領域専攻	4 回生
児玉 萌	国語領域専攻	4 回生
宮側由加里	国語領域専攻	4 回生
劉 飛亜	教育学専攻	4 回生
喜屋武 剛	国語領域専攻	3 回生
杉山 貴俊	教育学専攻	3 回生
郭 焜	教育学専攻	3 回生
細見真莉子	教育学専攻	1 回生
尾嶋美菜子	教育学専攻	1 回生

3. 助言教員

浜田 麻里先生 (国文学科)

第2章 実施経過 (年間計画)

4 月	新入生勧誘
5 月	夏の活動を企画
6 月	夏の活動の施設予約 活動内容検討 京都新聞取材
7 月	活動内容決定 活動準備

- 朝日放送取材
- 8月 夏の勉強会を実施
食材買い出し
夏の活動を実施
- 10月 ヒューマンフェスタの準備
- 11月 ヒューマンフェスタに参加
- 12月 募金活動
冬の勉強会を企画
冬の勉強会を実施

第3章 内容や成果など

1. 夏の活動について

(1) 1日目・勉強会兼事前活動

*日時：2013年8月10日（土）

*場所：京都教育大学 A1教室

*タイムスケジュール

9:30 墨染駅、JR 藤森駅に集合

10:00 勉強会

1時間目

11:00 2時間目

12:00 昼食

13:00 24日の事前活動

16:00 解散

*参加人数 子ども 15人

スタッフ 9人

*各内容と結果

・勉強会について

《内容》

子どもは夏休みということもあり、学校の宿題を中心に行った。子どもたちがやりたいものをやり、わからないところをスタッフが教えるという方法を取った。

子どもたちが持って来た宿題の中でも税金について意見を書く税の作文が、一番苦手のようだった。税金というものについて深く知らないことと、知ったとしてもそれをどう表現すればいいのかがわからないようだった。

理科や社会は覚える語句が難しく、言葉からイメージがわからずに覚えるのに苦労し

ている様子が見られた。



《結果》

やはり学習において最も大きな障壁は言語能力であることが顕著に表れていた。国語だけではなく、その他の教科においても問題文が理解できない、解説を読んでもわからないといった場面が目立った。ごく単純な問題においてもそういったことが起こり得るため、子どもたちは問題の難易度以前にモチベーションを失ってしまう。生活言語（日常会話など生活を送るための言語）だけではなく、学習言語（勉強をするために使う言語）の日常的な補佐、指導が必要であるだろう。

また、学習のモチベーションをテストや成績とは違い、将来や成長などの異なる動機をともに探すことで、子どもたちも前向きな姿勢を見せてくれるのではないだろうか。たけのこ会や来年度での活動でも子どものモチベーションについてはよく見ていきたい。

・事前活動について

《内容》

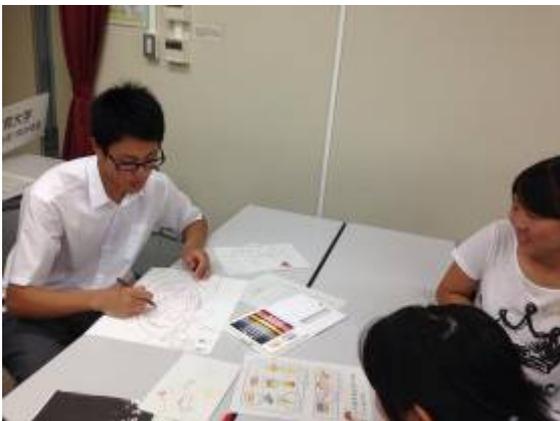
初参加の子どももおり、この日は野外活動である24日のための顔合わせの意味合いもかねていた。そこで、24日に活動するグループに分かれてもらい、簡単なレクリエーションをした。言葉を使った簡単な遊

びで、初めて会った子どもと話をする場面があった。

その後、野外活動ではお好み焼きを作るので、グループごとにお好み焼きに入れる具を選んでもらい、自分たちが作るお好み焼きを絵にかいてもらった。

《結果》

見知らぬ子どもたちもいるため、冒頭は緊張気味な雰囲気であったが、スタッフも間に入り徐々にうちとけることができていた。今回、アイスブレイキングとしては言葉をあまり使用しなくてよいレクリエーションを考えたことが、子どもたちの能動的な参加を促せたのではなかと思う。お好み焼きの具を考えるという活動においても、参加回数が多い子どもたちが初めての子どもたちに話を振るなどと言った場面が多く見られ、これまでの活動を経ての成長が感じられたのはよかったと思う。次回以降も続けていきたい。



(2) 2日目 野外活動

＊日時：2013年8月24日（土）

＊場所：友愛の丘 ちろりん村

＊タイムスケジュール

9:00 大学集合

9:30 大学出発

10:15 友愛の丘に到着

10:20 自己紹介

11:00 お好み焼き作り

13:00 片付け

14:30 友愛の丘出発

15:10 大学に到着

15:15 ふりかえり

16:00 解散

＊参加人数 子ども 11人

スタッフ 9人

＊各内容と結果

・バスレク

《内容》

絵での伝言ゲームを行った。言葉を使った伝言ゲームでは、言語能力に差がある子どもたちでは不公平になるので、配慮した。

《結果》

子どもたちは物をそれぞれの絵で表して楽しんでしたが、簡単そうだったので子どもたちの語彙力を考えながら問題を難しいものに変えてもよかった。

・お好み焼き作り

《内容》

作り方を絵を中心としたプリントで説明し、それぞれのグループにスタッフが補助で入ってお好み焼きを作った。かまどに火を起こすところから始めた。お好み焼きを家で作ったことがある子はほとんどおらず、包丁の持ち方も知らない子もいた。そのような子に、料理が得意な子が教えてあげている場面があった。気乗りのしない子がいたが、一度お好み焼きをひっくり返させ、褒めるという働きかけをしたところ、その後も積極的にお好み焼きを焼くようになった。

《結果》

道具も万全ではなかったが、子どもたちはあるもので工夫してお好み焼きを作っていた。包丁を上手に使える子、火を懸命に起こしてくれる子、お好み焼きをひっくり返すのが上手な子とそれぞれが活躍をしていた。火が強すぎて焦げたグループもあったが、皆おいしそうに食べていた。

作り方が全て伝わってはおらず、各グループを回りながら補足をしていった。紙と言葉だけでなく、実演して見せた方がわかりやすかったと思う。

・ふりかえり

《内容》

雨が降っていたこともあり、大学に戻ってからふりかえりを行った。このふりかえりでは、自分のよいところを知ることを目的とし、グループのメンバーによいところを書いてもらうことにした。自己肯定感を高め、自分に自信をもってもらおう意図で行った。

《結果》

恥ずかしがってあまり書けない子もいたが、自分のよいところが書かれたカードを見ると照れるように笑っていた。

2. たけのこ会について

月に一度の割合で、フィリピン人コミュニティ「パグアサ」と協力しフィリピンルーツの子どもたちに勉強を教える会（通称たけのこ会）を開いている。

*実施経過

4月14日 5月12日

6月23日（京都新聞社 取材）

7月28日（朝日放送 取材）

9月29日 10月27日

11月14日 12月22日

*日時：月に一度

*場所：京都市地域多文化交流
ネットワークサロン

《内容》

今年度は小学生が参加するようになり、スタッフの活動も少し変化があった。小学生は2年から4年生で、集中力が中学生よりないので、すぐにお絵かきをしてしまうので、こまめに勉強する教科を変えたり、

学習にゲームの要素を入れたりした。休憩時間には公園で一緒に遊び、宿題が全て終わった時は絵本を読んだり、カルタをしたりと言語を含む活動を取り入れた。

《結果》

小学生に向けた補助や活動を考え実践するようになり、活動の幅が広がった。小学2年生は九九の時期であり、ゲーム形式で楽しく暗記するなどの支援を行った。後日、子どもたちの学校の先生から九九の暗記を頑張るようになったとの言葉をもらった。

また、月に一度子どもたちと会うことで彼らの成長と課題を感じるが多くなった。自分のルーツに自信が持てなかったり、文化を好きになれなかったりする子どもたちにどう働きかけていくかが今後の私たちの課題でもある。



3. 京都新聞社取材

*日時：2013年6月23日（日）

*場所：京都市地域多文化交流
ネットワークサロン

《内容》

7月13日の京都新聞夕刊「@キャンパス」のコーナーで、たけのこ会での活動と外国にルーツを持つ子どもの現状について紹介した。その過程で、京都市の現職の中学校の先生やパグアサのメンバーにインタビューをした。

《結果》

子どもたちが頑張る姿を写真も使って伝

えることができた。しかし限られた文字数と、読者が一般の方ということで進学や経済状況など深い問題まで伝えることができなかったのが心残りである。

4. 朝日放送取材

*日時：2013年7月28日（日）

*場所：京都市地域多文化交流
ネットワークサロン

《内容》

朝日放送の方が京都に住むフィリピンの人たちについて特集を組むとのことで、たけのこ会の活動を紹介した。小学生の子どもたちは初め、カメラに恥ずかしがって質問にも答えられなかったが、最後にはカメラマンのお兄さんに懐いていた。

取材の方は子どもたちに学校でのことや、生活を尋ね、スタッフや先生、パグアサの方に話を訊いていた。後日たけのこ会で放送を見、意見を交換した。

《結果》

番組の内容としては、フィリピンルーツの子どもが抱える心の葛藤に重きをおいていた。たけのこ会での勉強会や、小学生が元気に遊ぶ様子、中学校での学習ボランティアが映っていた。

視聴されたフィリピン団体パグアサの方は、社会に適應する上の問題や経済的な問題については触れられておらず、またそれを支援する団体についてもう少し時間を割いてほしかったと言っていた。

3. 京都ヒューマンフェスタ 2013

(以下ヒューマンフェスタ) について

*日時：2013年11月3日（日）

*場所：京都市勧業館みやこめっせ

《内容》

ヒューマンフェスタは京都府が主催する人権啓発イベントであり、様々なNPOによる講演や展示が行われる。そこに、日本

に在住する外国にルーツを持つ子どもたちを支援する団体として、つながる会が参加を要請された。ブースを設営し、そこで子どもたちの現状やつながる会の活動を紹介した。また、ヒューマンフェスタの活動についてのDVD製作に協力し、来場してくれた方への人権クイズ出題者として参加した。

《結果》

様々な年齢の方がブースを訪問して下さった。帰国渡日児童の実態について興味をもたれた方が多く、スタッフと話し込む様子も見られ、多くの方々に帰国渡日児童について、またその実態や問題解決への活動を知ってもらおうという当初の目的に沿って活動することができた。

しかし、ブース内の展示や資料作りなど人々に私達が行っている活動についてもっと興味を持ってもらえるような工夫が必要だったと感じる場面が多かった。また、私達も訪問された方々の質問により詳しく答えられるようにさらに帰国渡日児童の実態やその背景について勉強しないといけないと改めて強く感じる事ができた貴重な機会だった。

5. 募金活動について

*日時：2013年12月9日（月）

～13日（金）

*場所：大学構内

《内容》

台風30号で被害にあったフィリピンを支援するため、5日間昼休みに募金活動を行った。

《結果》

学生や先生方に募金していただき、計44,964円集まった。フィリピンペソに換金し、フィリピン赤十字に送金した。

募金してくださった方々にはお礼を申し上げます。

6. 冬の活動について

*日時：2014年1月4日（土）

*場所：京都教育大学

*参加人数：スタッフ8人

子ども16人

《内容》

外国にルーツをもつ中学生・高校生を対象に勉強会を行った。勉強の内容は各自が学校で学習しているところとし、わからなければそのつどスタッフに質問するという形式で行った。受験が迫った生徒もいるので、なるべくまじめな雰囲気的活動にしたいと考えていた。

また今回はつながる会OBや生徒の学校の先生にも当日スタッフとして参加していただき、私たちも多くの刺激を受けた。

《結果》

長時間の勉強会であったので、午後には集中力の切れた生徒もいた。何人かの生徒を連れ出してボール遊びを行った。結果的にはよい気分転換になったようだった。

しかし、当初主な対象としていた受験生で、集中がきれてしまった生徒がいたのは問題だった。あらかじめ休憩の時間をもう少しとっておくべきだったと感じた。

休憩時間には、生徒の日ごろの学校生活のようすをきいた。授業が難しい、部活の先生が面白い、など。その中に、クラスメイトにどうしても勉強で負けたくない人がいる、といった生徒もいた。

冬の活動には参加していないが、つながる会でふだん指導しているなかでも同じことを言った生徒がいる。その生徒ははじめ日本語があまり話せず、勉強もわからなかったもので、あるクラスメイトから馬鹿にされていた。そのことが悔しくて必死で日本語と学校の勉強を覚えたという。

言葉のせいで馬鹿にされることはあってはならないので、子どもには「馬鹿にされないため」よりもっとプラスの動機で日本

語や学校の勉強を学んでほしい。しかし、多くの外国にルーツをもつ子どもが同じような経験を経て日本語を習得しているのが現状なのであると思う。

第4章 まとめや反省、今後の展望

この活動に参加して2、3年になる生徒も増えた。長く参加してくれている子どもどうしでよい関係が築けていることは喜ばしいが、新しく参加する子どもにとって少し輪の中に入りにくく感じることはないかと思われることもある。子どもどうしが早く打ち解けられるように、夏の活動では年長の子どもにはたらかけたりもした。思うようにいかないこともあるが、人間相手のことであるので、あせらずゆっくり見守ることも必要であると考ええる。

また、大人とはふつうに話せても、生徒の間ではなかなか心を開けない子どももいる。そのような子どもに対して、もっとも効果的なのは周りの子どもからの接触である。とくに、かつて同じような境遇を経験した子どもであれば、いくらか悩みを理解しやすい立場にあるだろう。外国にルーツをもつ児童生徒がたがいにふれあえる場を提供し、自分のルーツを肯定的にとらえられるようになってほしい。つながる会の目標の一つであるが、改めてそれを実現できるように努力していきたい。

加えて、スタッフの拡充もしなければならない。現状では活動を運営するうえで人手が足りないと感じられることが多々ある。学習面でのフォローに関しても、教科を分担して教えられる程度の人数が望ましい。これまでにできつつある他大学とのつながりも大事にしながら、活動をスムーズに行える人数のスタッフを確保していきたい。

この活動で得た経験は将来教師になった時に生きてくるものだと思った。今後も子どもたちとよい信頼関係を築いていきたい。